

# フリーターとニートのイメージに関する一考察

伊藤 嘉奈子 (子ども心理学科・講師)

## A Study on The Images of Freeter and “NEET”

Ito, Kanako

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the images of freeter and “NEET” that students had about . Two hundred seven-eight students participated in this study and were asked to answer a questionnaire. Category analysis of the images found a few aspects.

As a result, compared with a image of freeter, it was made clear that many students had a negative image about “NEET”.

This suggested that there is a necessity for the provision of career support which enables them to understand the meanings of freeter and “NEET” exactly.

Keywords : freeter, NEET, image, career support

キーワード：フリーター、ニート、イメージ、キャリア支援

### I. 問題と目的

近年、フリーターやニート、ひきこもりなど、若者をめぐる様々な問題が取り上げられている。特に、フリーターとニートに関しては、若年者をめぐる雇用の問題として、研究がなされるようになった。

「フリーター」とは、ドイツ語で労働者を表す「arbeiter」と、英語の「free」を組み合わせた造語であり、1990年代前後に、若年非正規雇用者を表す言葉として使用されてきた。その定義は、定まっておらず、厚生労働省（2000）の定義では、年齢15歳～34歳、卒業者であって、女性については未婚の者とし、さらに、現在就業している者については、呼称が「アルバイト」または「パート」である者のうち定職化（5年

以上継続）している者を除き、現在無業の者については、家事も通学もしておらず、「アルバイト」「パート」の仕事を希望する者としている。一方、内閣府（2003）の定義では、15～34歳の若年（ただし、学生と主婦を除く）のうち、パート・アルバイト（派遣等を含む）及び働く意志のある無職の人と定義している。すなわち、働く意志はあっても正社員としての職を得ていない若年も対象としているため、前述の厚生労働省の定義と異なり、派遣労働者、嘱託、正社員への就業を希望する失業者なども含まれる。

そして、それぞれの定義に基づいて統計調査がなされており、厚生労働省の定義によれば、フリーターの数は2006年で187万人であった。一方の内閣府の定義によれば、2001年で417万人であった。ちなみに、

内閣府の調査は、毎年行なわれるものではないため、両者のデータ比較が正確にはできないのだが、約2倍の違いがあることがわかる。厚生労働省の統計においては、2004年～2006年の間は景気の回復により、若干の減少傾向が見られるのだが、いずれの定義においても、10年間で倍増している。内閣府の統計においては、1992年の統計では20代前半のフリーター数が多かった。しかし、2001年には20代後半が増え、さらに30代の急増が特徴となり、特に、若年人口（15～34歳）の9人に1人（12.2%）、学生・主婦を除いた若年人口の5人に1人（21.2%）がフリーターとなっているとしている。そして、この結果より、フリーター生活の長期化が懸念されるようになり、フリーターを自らが選択したことによるマイナス面への本人の気づきの乏しさなどが指摘されるようになった。

続いて、近年になり、フリーターよりも、さらに深刻な社会的問題としてニートが注目されている。「ニート（NEET）」とは、2004年頃、イギリスの若年就業政策用語として作られた造語であり、Not in Education, Employment or Trainingの略語である。すなわち、就学中でなく、職業訓練中でもなく、仕事に就いていない（働こうとしていない）者と訳されている。しかし、日本においては、若干異なる意味で使用されている。厚生労働省（2006）の定義によると、非労働力人口のうち、15～34歳の未婚で家事や家業の手伝いもしていないその他の者としている。一方、内閣府（2006）の定義によると、学校に通学せず、独身で、収入を伴う仕事をしていない15～34歳の個人としている。

やはり、それぞれの定義に基づいて統計調査がなされており、厚生労働省の定義によれば、ニートの数は2006年で62万人であった。一方の内閣府の定義によれば、2002年で85万人であった。フリーターの統計調査と同様で、内閣府の調査は、毎年行なわれるものではないため、両者のデータ比較が正確にはできないのだが、やはり大きな差があることがわかる。

これらの若年者の雇用問題に対し政府全体として対策を講ずるため、文部科学省、厚生労働省、経済産業省及び内閣府の関係4府省は、2003年4月に「若者自立・挑戦戦略会議」を発足させ、同年6月には、教育・雇用・産業政策の連携強化等による総

合的な人材対策として「若者自立・挑戦プラン」を取りまとめた。その中でも、文部科学省（2003）は、キャリア教育総合計画として、①小学校段階からの就労観、職業観の醸成、②企業実習と組み合わせた教育の実施、③いわゆるフリーターの再教育、④高度な専門能力の育成などという内容を打ち出した。これを受け、小学校から職場体験を中心にしたキャリア教育が実施されるようになった。高等教育機関である大学においては、キャリア高度化プランという名目で、若者問題（高い失業率、増加する無業者、フリーター等、高い離職率など）を解決するためには、教育、人材育成、雇用の各システム全般の改革が必要とし、若年者を中心とする人材育成や創業・企業活性化等による就業機会を創出したりして、先導的短期教育プログラムの開発・推進等が実施されるようになった。このように若年者の雇用問題が重要な課題と位置づけられるようになり、大学においては、キャリア教育の一環として取り組まれるようになってきた。

ところで、フリーター、ニートに関する研究は、始められたばかりであり、特に、心理学的観点から分析した先行研究はまだ少ないと言える。

筆者は、大石・松永・伊藤・鈴木・前野（2007）において、青年から大人への移行期における若者の自立意識の構造、及び、自立の実態、若者の自立をめぐる問題に対する認識などを探るため、大学生を対象として質問紙調査を実施した。その結果、自立観については、経済的自立を重視し、大人観については、心理的自立を重視する傾向が見られた。すなわち、現代の社会において「大人になる」ということは、経済的自立を前提条件とし、さらに、心理的に成熟することととらえられていることが示された。さらに、若者の自立をめぐる問題として、「フリーター」、「ニート」、「ひきこもり」を取り上げ、各用語の認知度、各問題の要因についての認識、自己の将来像との一致度を尋ねた。その結果、各用語の認知度については、いずれも高く認知していると自己評価していた。次いで、各問題の要因については、いずれの問題においても6割以上が「本人の問題」とした。しかし、フリーターのみは、「社会の問題」が3割程度見られた。ニートとひきこもりは、

「親の問題」「社会の問題」が二分していた。以上より、各問題に対する認識が若干異なっていることが明らかとなった。

続いて、斎藤・守谷・社浦・山ノ内・鬼頭・入交（2007）、守谷・社浦・山ノ内・鬼頭・入交・斎藤（2007）、社浦・山ノ内・鬼頭・入交・斎藤・守谷（2007）は、ニートという概念が使用される文脈には、経済学的な定義を離れ、ネガティブなイメージが付加されている可能性があるとして、ニート認識の全体構造を検討するために質問紙調査を実施している。特に、「ニートの定義」の自由記述と、「ニートのイメージ」をSD法により実施した結果、ニートはあいまいに理解されており、ニートと呼ばれる青年層のイメージと一般の青年層のイメージとを比較した結果、ニートについてはネガティブな内容が多いことが明らかとなった。そして、大学のキャリア教育での正しいニート理解が求められるとしている。

そこで、本研究においては、大学でのキャリア教育や、若者の社会的問題への心理的支援などを考えていくにあたり、まずは、フリーターとニートについてのイメージを尋ね、両者に対する認識の違いを明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### 1. 調査対象者

千葉県の国立大学と神奈川県私立女子大学の1～4年の学生278名（男性197名、女性81名）。所属学部は、工学部、理学部、法経学部、文学部、教育学部、園芸学部、医学部、看護学部、児童学部であった。

### 2. 調査時期・方法

無記名による質問紙法にて、2006年2月に実施した。

### 3. 質問紙の構成

フリーターとニートに関する次の質問項目から成る質問紙を作成した。

問1.「フリーター」に対して、あなたはどのようなイメージを持っていますか。

問2.「ニート」に対して、あなたはどのようなイメージを持っていますか。

いずれも自由記述にて回答を求めた。

## 4. 分析

分析の際には、斎藤ら（2007）によるニートの定義を自由記述にて求め、それをカテゴリー分析した研究と、守屋ら（2007）によるニートのパーソナリティ特性を自由記述にて求め、それをカテゴリー分析した研究を参考にした。筆者と質的分析法の訓練を受けた1名の分析協力者の2名により、一致度90%以上をカテゴリー化した。

なお、本稿では、全体的な傾向を把握することを主目的とするため、男女差、学年差、学部差の分析は行わなかった。

## 5. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的を説明した上、無記名式で、個人が特定されることはないこと、プライバシーは保護されることを説明し同意を得た。

## III. 結果

### 1. フリーターに対するイメージ

フリーターに対するイメージを表す語句は、332個収集された。これらをカテゴリー分類したところ、14のカテゴリーに分類された。その結果をTable 1に示す。

多く挙げられたカテゴリーを見ると、まず、「アルバイトをして働き、自活・自立しているイメージ」が71個（21.4%）と多く、具体的記述としては、定職に就かず、アルバイトをして働いているイメージという記述が多く見られた。

次いで、「自分探し・やりたいこと探し・その準備をしているイメージ」が48個（14.5%）、「自由・気楽に生きているイメージ」が46個（13.9%）であった。具体的記述として、目標を探し、その目標に向けて準備中の期間にいる人であり、自由で、今を生きて楽しんでいるという、前向きの姿勢をとっている人という内容と受けとめられるような記述が多く見られた。さらに、「受容」が33個（9.9%）挙げられており、フリーターに対するイメージは、悪いイメージではなく、その本人が良ければそれでよく、普通の社会人となんらかわらないのではないかという意見もあることがわかった。

一方で、「将来や現在から逃避しているイメージ」が30個（9.0%）、「社会的地位・責任が低い」が20個

(6.0%) 挙げられ、前述のカテゴリーと正反対の意見であり、むしろ、現在、及び将来の展望や現実検討識の希薄さや、さらには社会とのかかわりも希薄化し、社会に所属していないようなイメージという、宮本（2004）が言う社会的弱者ともいえる表現が挙げた。

さらに特徴的なのが、「ネガティブなパーソナリティ特性」と関連づけたイメージ形成が、18個（5.4%）に見られたことである。すなわち、甘い、やる気がない、いい加減など、本人に問題があると捉えることも可能となると考えられるような記

述である。本人の努力などの域を超えたことがらや特性についての記述もあった。そして、自分自身と自分の考えるフリーター像とを比較し、「自分はフリーターになりたくない」や、「かっこ悪い」などと記述し、フリーターと自分を分離させて考えていることが伺えた。

後述のニートのイメージのカテゴリーには見られなかったものとして、「社会情勢の影響」があった。すなわち、フリーターは、社会情勢上の事情により浮かび上がったものであり、社会情勢の中での状態像を示すものというような、本来の定

Table1. フリーターのイメージ

(N=278; 複数回答)				
カテゴリー	記述数	%	具体的内容	内訳記述数
1. アルバイトをして働き、自活・自立している	71	21.4%	・アルバイトをして働いている	31
			・自活している	12
			・定職に就いていない	11
			・アルバイトをし、就職する気がない	7
			・自立している	3
			・たくさん働ける	2
			・頑張っている	5
2. 自分探し・やりたいこと探し・準備	48	14.5%	・自分探し・やりたいこと探しをしてい	17
			・夢を追っている	14
			・目標を持っている	11
			・やりたいことをするため準備してい	6
			・自由	22
3. 自由・気楽に生きている	46	13.9%	・今を生きている	9
			・楽しんでいる	7
			・気楽	5
			・遊んでいる	3
			・悪いイメージはない	18
4. 受容	33	9.9%	・本人が良ければよい	9
			・人それぞれ	3
			・普通の社会人と変わらない	3
			・将来のことを考えていない	10
5. 将来・現在からの逃避	30	9.0%	・将来が不安	9
			・現実を直視できていない	6
			・若者	5
			・不安定	9
			・責任感がない	5
6. 社会的地位・責任が低い	20	6.0%	・社会的地位はない	2
			・中途半端	2
			・生活が大変そう	2
			・甘い	3
			・やる気がない	3
7. ネガティブなパーソナリティ特性	18	5.4%	・困る	3
			・いい加減	2
			・だらしない	2
			・能力がない	2
			・夢がない	1
			・飽きっぽい	1
			・情緒不安定	1
			・ニートよりもまし	7
			・ニートとかわらない	6
			・良いイメージがない	9
8. ニートとの比較	13	3.9%	・自分よりはなりたくない	6
9. 良くないイメージ	9	2.7%	・かっこ悪い	1
10. 自己との比較(マイナス)	7	2.1%	・社会情勢上の事情	6
11. 社会情勢の影響	6	1.8%	・よくわからない	4
12. わからない	4	1.2%	・関心ない	1
13. 無関心	1	0.3%		
14. 無記入	26	7.8%		26
合 計	332	100.0%		332

義に近い記述であった。

このような記述もあったが、「わからない」「無関心」「無記入」の3つの記述については、合わせると31個（9.3%）を占めており、日常で実際にフリーターという名称は聞くが、その概念理解までは及んでいない者の存在は無視できないものであるということが伺えた。

## 2. ニートに対するイメージ

ニートに対するイメージを表す語句は、312個収集された。これらをカテゴリー分類したところ、15のカテゴリーに分類された。その結果をTable 2に示す。

まず全体的に見ると、ニートのイメージは、マイナス、あるいは、ネガティブなイメージの記述が多く、ニートに対する厳しい評価や価値観が見

受けられた。一方、共感的な記述は、「受容・共感・同情」の13個（4.2%）と「自分との比較（プラス）」の12個（3.8%）の2つのみであった。その具体的記述を見ると、ニートは、現代社会の反映であり、現代社会の犠牲者でもあり、かわいそうというイメージや、自分の現状と比べ、好きなことをしてうらやましい生活という意見が挙げられた。すなわち、それらの記述には、フリーターのようにポジティブに活動する面へのプラスの評価などは含まず、どちらかと言えば、自分自身と比べ、自分とは全く違う存在として距離を持った上での同情的感情や、非現実的な憧れ感情などが存在することがその背景に考えられよう。

多く挙げられたカテゴリーを見ると、前述のと

Table2. ニートのイメージ

(N=278; 複数回答)				
カテゴリー	記述数	%	具体的内容	内訳記述数
1. 気力・意欲のなさ	77	24.7%	・働く意欲がない	32
			・何もしていない	17
			・やりたいことがない	14
			・無気力	9
			・生きる意欲が感じられない	5
2. 自立していない	41	13.1%	・甘え	18
			・親に頼って生きている	18
			・子ども	3
			・無責任	2
3. 将来・現在・社会からの逃避	29	9.3%	・社会からの逃避	13
			・将来を考えていない	10
			・現実直視できない・現実逃避	6
4. ネガティブなパーソナリティー特性	27	8.7%	・ダメな人	16
			・暗い・弱い性格	8
			・かっこ悪い	2
			・ずるい	1
5. マイナスイメージ	20	6.4%	・良くない印象	16
			・悪い印象	4
6. 怠惰	15	4.8%	・だらけている	11
			・頑張っていない	4
7. 受容・共感・同情	13	4.2%	・現代社会の反映・犠牲者	6
			・気持ちはわかる	4
			・かわいそう	2
			・不自由	1
8. 自己との比較(プラス)	12	3.8%	・うらやましい	4
			・好きな事をしている	7
			・楽しそう	1
9. わからない	10	3.2%	・よくわからない	10
10. 他の概念と混合	8	2.6%	・ひきこもりと同義	8
11. 自己との比較(マイナス)	7	1.3%	・なりたくない	7
12. 暇人・時間の無駄使い	4	1.3%	・暇人	3
			・時間の無駄使い	1
13. 言葉からのイメージ	4	1.3%	・かっこいい名称なので本人達は偉そう	4
14. 分類不能	15	4.8%	—	15
15. 無記入	30	9.6%	—	30
合 計	312	100.0%		312

おり、マイナスや、ネガティブな記述が多く、最も多く挙げたのが「気力・意欲がないイメージ」で77個（24.7%）であり、次いで、「自立していないイメージ」すなわち、親に頼って生きており、未熟で甘えているイメージが41個（13.1%）に挙げられた。これらからは、フリーターとは違い、アルバイトなどもしておらず、かつ、目標に向かって進むための一過程などという状態を示すのではなく、むしろ、働く意欲や生きる意欲さを感じにくいというようなイメージや、親に頼って生きており、それを「甘え」として表現されたものが多く見受けられた。

続いては、ネガティブなパーソナリティ特性と怠惰を挙げる者が多かった。すなわち、現実や将来と向き合うことから逃げている姿勢などのイメージが多く、だらけており、そのような姿勢を「ずるい」と評価するような具体的記述もあり、フリーターに比べ、非常にネガティブな印象形成の記述が多く見受けられた。

ニートだけに見られた特徴的なカテゴリーは、まず、「暇人・時間の無駄使い」（4個,1.3%）であり、何もしないで過ごしているというイメージと関連させて記述されていた。次いで、「言葉からのイメージ」（4個,1.3%）であり、ニートなどという聞こえの良い名称を使用しているため、その本人が自分自身の置かれた現状などをしっかりと認識しないまま、ともすれば何の問題や課題も感じずに過ごしているのではないかという厳しい記述であった。これらは、一部のニート像について想起し、解釈したとも考えられるが、このような印象を持つ者もいることが明らかとなった。

他には、フリーターと同様に、「わからない」「無記入」の2つについては、合わせると40個（12.8%）を占めており、フリーターよりも、ニートの方が人数が多く、その概念理解がより進んでいない者の存在が無視できないものであるということが伺えた。

#### IV. 考察

これらをみると、経済的に自立しているかどうか両者のイメージ形成に大きな影響を及ぼして

いることが伺えた。そもそも、フリーターもニートも、雇用問題や、経済的な問題などとの関連で作られた語句であり、それに基づいて定義されているため、本調査結果を見ると、本来の定義の意味を理解してイメージ形成がなされた人もいたことが伺える。

しかし、定義を理解した上でそれらの語句を使っていないと思われる人からは、フリーターやニートは、自分自身とは無縁なものという意識もあると推測され、どちらかという厳しい評価や価値観を含んだ具体的記述が多く、その多くが本人の問題、すなわち、努力不足、気力不足などに帰属しているような傾向が見受けられた。

以上のように、両者の定義に関して、正確に理解している人は非常に少ないことが明らかとなった。本来の定義からかけ離れたイメージ、特に、ネガティブなイメージを抱えていることがわかった。かつ、それぞれの語句は、状態像を示す名称であるのだが、価値観などを含有する語句として解釈され、使用されている傾向が伺えた。

特に、ニートという語句は、労働政策上の概念として作成され、日本では未就労における状態像を示した概念に過ぎない。よって、本来は、パーソナリティ特性などといった価値観などを含む概念ではない。しかし、本研究で明らかになったように、価値判断などを含む概念として使用されている現状が見受けられた。また、ニートに該当する人でも様々な状態があり、前述のような自由記述にあてはまらない人が多いのだが、これらの語句を使用することにより、多角的な視点で捉えることができず、ある一定のイメージでレッテルを貼ってしまう危険性もありうることが伺えた。こうして、ますますニートの本来の状態が見えにくくなってしまおうと考えられよう。

本田（2006）、安田（2007）では、フリーターとニートの増加要因として、本人の心理的問題や個人の意識の変化よりも社会構造的変化の影響や、家庭・家族のあり方の影響が大きいと述べている。本田（2006）は、近年の若年無業者の増加の大半が働く意志がある失業者であることを指摘し、「ニート」をいう用語が、「働く意欲がない」イメージ

を拡大させることによって、若年雇用問題を見えにくくしている問題を指摘しており、「ニート」が本来の定義を離れ「駄目なもの」を象徴する言葉として蔓延している社会を批判している。

以上のような状況の対策として、大学においては、このような誤った社会的イメージを払拭していくような教育の実施が求められよう。具体的には、キャリア教育において、それぞれの語句の正しい理解を深めるとともに、マイナスイメージの修正を行ない、さらに学生支援のあり方について検討することが必要と考えられよう。

## V. 今後の課題

本研究では、両者のイメージは、実際に見聞きしたことからイメージ化なのか、単なる言葉からの印象形成なのか不明であり、イメージ形成過程の分析まではできなかったため、今後の課題としたい。

さらに、本研究で収集できたイメージ言語を用いて、質問紙を作成して、質問紙調査を実施し、因子分析などを用いて、男女差、学年差、学部差を明らかにすることも今後の課題である。その上で、大学のキャリア教育のあり方や、学生相談などによる心理的支援のあり方を考え、検討していく必要があると思われる。

## 引用文献

- 本田由紀・内藤朝雄・後藤和智 2006 「ニート」  
 って言うな！ 光文社新書
- 厚生労働省 2000 労働経済の分析（労働経済白書  
 平成12年度版）
- 厚生労働省 2006 労働経済の分析（労働経済白  
 書 平成18年度版）
- 宮本みち子 2002 若者が《社会的弱者》に転落する  
 洋泉社
- 文部科学省 2003 若者自立・挑戦プラン（キャ  
 リア教育総合計画）
- 守谷賢二・社浦竜太・山ノ内早苗・鬼頭能子・入  
 交洋彦・斎藤富由起 2007 青年期未就労者  
 の支援に関する研究 その2—青年層を対象  
 としたパーソナリティ要因の認知について—  
 日本心理臨床学会 第26回大会 発表論文  
 集, P.458.

内閣府 2003 国民生活白書（平成15年度版）

内閣府 2006 青少年の就労に関する研究会

大石美佳・松永しのぶ・伊藤嘉奈子・鈴木公基・  
 前野澄子 2007 青年から大人への移行期の  
 自立意識に関する研究—大学生の自立意識の  
 構造とその実態— 鎌倉女子大学学術研究所  
 報 第7号, Pp.55-73.

斎藤富由起・守谷賢二・社浦竜太・山ノ内早苗・  
 鬼頭能子・入交洋彦 2007 青年期未就労者  
 の支援に関する研究 その1—キャリア教育  
 の視点から— 日本心理臨床学会 第26回大  
 会 発表論文集, P.457.

社浦竜太・山ノ内早苗・鬼頭能子・入交洋彦・斎  
 藤富由起・守谷賢二 2007 青年期未就労者  
 の支援に関する研究 その3—青年期未就労  
 者のイメージに関する研究— 日本心理臨床  
 学会 第26回大会 発表論文集, P.459.

安田純子 2007 家族（家庭）の観点で考えるフ  
 リーターとニート—家政学からのアプローチ  
 （第1報）— 郡山女子大学紀要 第43号,  
 Pp.143-155.

## 要旨

近年、フリーターやニート、ひきこもりなど、  
 若者をめぐる様々な問題が取り上げられている。特  
 に、フリーターとニートに関しては、若年者をめぐ  
 る雇用の問題として、研究がなされるようになった。  
 しかし、両者の定義ははっきりと定まっていない。

そこで、大学生278名に対し、フリーターとニ  
 ートのイメージについて、質問紙法にて回答を求めた。  
 カテゴリー分析を行なった結果、大学生は、フリー  
 ターに比べて、ニートに対しては、ネガティブなイ  
 メージを持っていることが明らかとなった。

したがって、両者について正しく理解すること  
 ができるよう、大学においてキャリア教育や、若  
 者の社会的問題への心理的支援などを実施するこ  
 との重要性が示唆された。

（2007.10.25受稿）